

佳作

(福岡県北九州市)

井上 清子

「愛する里子K君へ」

K君、あなたと初めて逢った日は、今でもはっきり思い出せます。

私達夫婦は、子どもが授からず、ずっと、さみしい暮しでした。

そんなある日、一日里親の募集を新聞の記事で知り、すぐ、あなたの住んでいる学園を訪ずれました。

私は、看護師しかも小児科の経験があったので、すぐに、子どもを紹介していただきました。

その子が、K君、四才のあなたでした。

プレイルームで、私達夫婦とあなたはおもちゃで、遊びました。人見知りもせずに、すぐに慣ついてくれましたね。「今度、おぼちゃんのお家へ遊びにおいでね」と問うと、「うん、行く」と答えてくれました。K君、四才のあなたでした。

一ヶ月後、迎えに行くと小さい体に大きなリュックを背負って待っていてくれましたね。

それから、川の字で、ずっと寝ていますね。

トイレも心配なく、一度もおもらしをせずに、うんこをしても、お尻を見せて「きれいになっている?」と言いましたね。

こんなに子どもって、愛らしいものかと、私は、心がうきうきしました。

それから、二泊三日のお泊りが始まりました。本当の里親になりたかったのですが、私はもう六十七才なのです。だからK君の親にはなれないと思っています。

二泊三日のうち、二日はすぐに過ぎて三日目帰る直前に「お母ちゃん」と呼びかけてくれましたね。

今年も、夏休みに、お泊りをしましたね。

今回は、迎えに行った車の中で、「あなたのお父さん、お母さんを憶えているの」「逢った事がない。知らない」「そんなら、私達が、お父さん、お母さんになろう」と言ってみました。それから、どこへ行くのも「お母さん、お母さん」と呼べるようになりましたね。K君、あなたも十一才になりましたね。

K君、あなたは私が愛する、私の宝物です。これからも甘えたり、おこられたりして下さい。

K君、生まれてきてくれて、ありがとうございます。